

な

ご

み

つ

う

し

ん

発行日：平成 29 年 5 月 22 日（第 29 号）

発行：島田療育センターはちおうじ

命が途切れるとき、人は「死」を迎えます。でも、そのあとも身近にいてくれる。見守っていてくれている。そんな不思議な感覚に包まれることがあります。そして、その感覚が人を救ってくれます。そんな物語を紹介します。

所長 小沢 浩

## ～陽の光り～

これは I ちゃんの物語である。I ちゃんは、4 歳のとき、急性脳症になりあつという間に天国に旅立ってしまった。あまりにも突然の出来事であった。ご両親は毎日泣き続けていた。まわりのお母さんたちは、心配のあまり毎日自宅を訪問した。数か月たったのちに、ご両親がいまだに立ち直っていないという話を仲間のお母さんたちから聞いた。

その話を聞いてからしばらくして、私は手紙を書いた。



「拝啓、朝夕の肌寒さの中にも、昼の太陽は暖かい陽を運んでくれます。いかがお過ごしでしょうか。

今日は、どうしてもお伝えしたいことがあってお手紙を送らせていただきました。ご両親のお気持ちからする

と大変失礼とは思いますが、お気にさわったらどうぞお許してください。I ちゃんが旅立ってから、もう 7 カ月がたちました。あの日、I ちゃんの最期を迎えたことは、実は不思議なことに私には連絡がありませんでした。こあららぶ（お母さんたちが開設した放課後等デイサービス）からはメールがありました。それをみたのは月曜日で、島田療育センターのスタッフは他の人から連絡がいつているものと思いい…ということで、私がそのことを聞かされたのは月曜日の朝でした。そのためにお通夜に出ることができずに、急いで告別式に向かったのです。最期の別れのときは、小雨が降ったりやんだりして、空全体を雲が覆っているどんよりとした日でした。私は、空が泣いているな～と思いながら、出棺を待ったのです。でも、覚えていますか。出棺のとき、雲の間から「陽の光り」がさしこみ、みんなを照らしてくれたのを。私は思わず空を見上げました。そうしたら私には見えたのです。I ちゃんの笑顔が。

1ちゃんの成長は、医師の立場からすると信じられないほどの素晴らしいものでした。お座りをしたり、両手を広げて抱っこをせがむまでになるなんて想像もつきませんでした。それは、ご両親の愛情に育まれながらすくすくと育ったからに違いありません。1ちゃんは、とっても幸せだったんだと思います。だから、そのことを伝えてもらいたくてわざと私に連絡がいかないようにしたんだと思います。だってお通夜の連絡がはいていたら、告別式には行かなかったと思いますから…。「陽の光り」を浴びることはできなかったですから…。

人生はさまざまです。今までに多くの人を見送ってきました。そのときにいつも感じるんです。人の一生の幸せの尺度は長さではない、生きている時間の輝きだと。



1ちゃんはいつも輝いていました。1ちゃんの人生をずっと一緒に歩ませてもらったこと、その出会いにとっても感謝しています。

何人かの方から、お父さんとお母さんが元気がないとの話を伺いました。だから、最近1ちゃんが私に言うてくるんです。

「お父さん、お母さんが元気ないから元気づけてあげて。私はとっても幸せだったし今も元気だからと」

私には、最愛の娘を失った悲しみは想像もつきません。2人の娘を抱える親として、こんな失礼な手紙を送っていいものか、ずっと考えてきました。でも、その想いがどんどん強くなるのを止めることはできませんでした。それは、1ちゃんの想いに他ありません。どうぞ、お体に気をつけてお過ごし下さい。今度会うときには、お互い笑顔で会いましょう。だって1ちゃんがみえていますから。

敬具

一月 小沢浩

数年後年賀状が来た。1ちゃんのご両親からだった。その年賀状には赤ちゃんが写っていた。

「1の妹です。先生、あのとき、私にも見えたんです、1が…。」

そんなメッセージが添えられていた。

そしてしばらくして、島田療育センターはちおうじでお母さんと再会できた。1ちゃんの妹も一緒だった。約束通りお互い笑顔だった。

見上げると青空がはてしなく広がっていて、その先には1ちゃんの笑顔があった。

(奇跡がくれた宝物 小沢浩著  
クリエイツかもがわ より)

